

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題 ：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

白 盛琇（ペク ソンス）

《アブストラクト》

この論文は、東アジア地域の大衆文化における共同制作の増加現象を捉え、その原因と現状を把握し、共同制作によって生産される大衆文化のこの地域における可能性と課題への理解を試みるものである。そのために、多様な共同制作の形態と作品の中で、今回は日韓合作マンガ『プルンギル』を事例研究した。このマンガは日韓の若者が両国の問題に関心を高め、認識差を克服するきっかけになる意図で作られたものである。この作品は一部分でしか話題にならなかったが、共同制作をビジネス的な視点や文化摩擦を克服するための方法としてだけでなく、より積極的に国家間の問題を解決していくための道としての可能性を提示したものであった。

I. 国際共同制作をめぐる問題提起

近年、東アジアにおいて大衆文化分野での共同制作に対する関心が高まり、実際多くのものが制作されてきている。分野によって共同制作に対する認識や実績などに差が見られるが、そのような制作形式が取られる目的は大まかに以下の四つに分類される。

第一はビジネスの視点からの戦略的な共同制作である。安定した資金力とより広い市場を確保するためであり、最も多くのケースがこの目的で行なわれている。第二は大衆文化の越境的な経済活動の反動として起こりうる文化

的摩擦—文化ナショナリズムを予防ないし緩和させるためである。第三は記念碑的な意味での共同制作である。ある面で政治的で、イベント的な性格の共同制作になるが、経済活動の論理に縛られることなく、友好的で発展的な関係を築きたいという基本的な動機に基づく内容になることが多い。第四は共同制作を国家間の問題を解決していく方法として取っているものである。共同作業を通して両国の関係、またはこの地域の問題と一緒に取り組み、理解を深めていこうとするものである。

大衆文化は人々の日常生活、欲望、価値、感情などが具現化されたものであり、現代社会においてその大衆文化的なものはメディア、主にマス・メディアを通して現れ、広がり、共有されるものとされる。特に北東アジアにおけるマス・メディアはそれぞれの近代国家の成立の枠の中で、発生・発達してきたもので、その国のマス・メディアはその国の国民意識・国民文化を反映する、または作り上げてきたとも言われている。つまり日本のマス・メディアの活動は日本の大衆文化が作られるということとほぼ一致するし、その内容は日本人の意識・価値・欲求などを現したものである、ということである。韓国では韓国のマス・メディアが発達し、その活動を中心に韓国の大衆文化が形成され、中国では中国のマス・メディアと中国の大衆文化が成り立てきた。

しかしながら、特に80年代以降、この地域で大衆文化の国際的な交流が活発になってきた。そして最近はこの「越境する大衆文化」についての議論も盛んである。そのような議論は研究者だけではなく、政治界や経済産業界、一般人をも巻き込んだの大きな関心事になり、そこで話題にされるものは「韓流」「日流」「華流」などのタイトルがつけられている大衆文化のもので、それぞれの国を背負う形にさえなっている。しかし国籍のラベルが貼られる大衆文化が話題になる一方で、国籍を中和させようともみえる共同制作の動き、つまり多国籍大衆文化も徐々に増えてきた。

すなわち、東アジア地域において一国中心で成長してきた大衆文化の国際

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

化とも言える現象が近年大変目立ってきた。そしてその「国際化」の中身は二通りの現状で現れる。一つ目は国籍が強化された形で国境をこえるものであり、二つ目は国籍を中和させる形をとるものである。前者に関しては大衆文化の輸入、輸出という形で多くの実績が積み重ねられ、もはやほぼ日常的なことになっているし、この現状についての研究も進んでいる。それに対し、後者は現実的な実績もまだそう多く無いこともあり、研究の対象としてもあまり注目されることは少なかったと思われる。

論者の関心は国際共同制作によって作られる大衆文化である。この性格の大衆文化を研究対象に選んだ理由は、東アジアにおける共同大衆文化圏形成の可能性とそれが作り出す大衆文化の内容とその意味と意義を検討するためである。つまり多国籍大衆文化はこの地域のどんな関係性、価値、意識を現し、どのようなものが排除されていくのか、この文化共同体の性格と意義はどこにあるかを問いていくことである。そのために、まずは現在までに様々なメディア分野で行なわれた国際共同制作の事例を分析・研究する必要があるが、その研究方法としては三つのアプローチが考えられる。

まずは作り手の研究である。つまり国際的な共同制作によって大衆文化を作り出す制作側に対する理解である。制作者たちはどのような意識と目的を持ち、どんな手段をもって、どのような過程を経て大衆文化を制作しているのかを分析していくのである。特に大衆文化は自然発生的なものであるより、ビジネス的な発想や活動と結びついて生まれる側面が強い分、制作者側の行為の結果として大衆文化を理解していくことは最も有効な方法の一つであると思われる。第二の方法はそうにして作り出された大衆文化の内容を分析することである。内容に含まれているメッセージ、思想、価値、感情などを読み解く作業になる。第三は受け手側の研究である。大衆文化を消費する人たちがその文化をどのように解釈し、利用し、受け取って、どんな行動を取るかをみる必要がある。

この論文では一つの事例を持って、制作者と作品内容を中心に検討する。その対象になる作品は日本と韓国の共同制作で作られたマンガ『プルンギル：青の道』であるが、このマンガを選んだ理由は、この事例が国際共同制作の代表的なものであると言うよりは、むしろ最も特殊なケースであるがゆえに、国際共同制作の意義や問題点を鮮明に浮彫りにさせることが出来ると思われたからである。以下ではこのマンガの事例を詳細に分析していくことにする。

大衆文化という言葉には、制作活動・経済活動の結果として生まれる「大衆文化商品」と、意味付与と解釈との相互作用が起きるテキストとしてのその「内容」の次元があるが、実際、この二つの次元は相互作用の中でお互いを成立させていくと思われるため、この論文では複次的な意味で大衆文化という言葉を使っている。共同制作という言葉に関してはその定義を明確にさせることがこの論文の目的ではないため、制作者側が自ら共同制作であると言及したものを研究対象にしている。

Ⅱ. 日韓共同制作マンガ『プルンギル：青の道』の事例研究

1. 作り手の論理—共同制作の動機と過程

2003年6月と8月の2回にわたって日本側の作り手であるマンガ雑誌の編集者鳥飼拓志さんと韓国側の担当者である金拾憲さんと鄭盛旭さんをインタビューした。両国の制作者それぞれに制作の目的、動機、仕事の内容について同じ質問をし、仕事の成果、意味、感想、今後の展開についての意見を聞いた。その結果、両国の制作者が一つの作品を作り出す際のあらゆる問題—仕事の運営上の問題だけではなく、文化や認識の違いの問題が噴出し、それらが作品そのものにもどう影響したかが見えてきた。以下ではそれらの制作者側から見えてきた共同制作の様子について述べる。

このマンガが日本と韓国で共同制作されるようになった目的ないし理由は二つある。まずは以上で述べた国際共同制作の第四の目的に当たるもので、

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

共同制作を通して日韓間の歴史的・社会的問題をお互いが理解し、話しあっていくきっかけになるようなものを作りたいということである。二つ目はビジネス的な観点である。両国で売り出すことによって両国の読者という、より大きい市場が形成され、売られる可能性に期待したのである。

これらの目的は無論両国の制作者が同意し、共有していたものであるが、前者は日本側がより強く感じていたし、後者は韓国側がより意識していた。日本側がこのような目的意識をはっきり打ち出した背景としては制作の中心人物である鳥飼さんの思いが強かったためと思われる。

この時点で、マンガ週刊誌「バンチ」の編集者であった鳥飼さんは、お父さんの仕事の都合で幼い時から海外暮らしが多く、小学生時代の1970年から1973年の間、韓国のソウルで暮らした。彼は日本人だという理由で近所の子供たちに石を投げられた。反面、日本の大人たちは韓国と韓国人の悪口を普通に口にする。その時、彼が体験した日本人と韓国人の間に存在する偏見や差別や異質な憎愛の感情は、韓国を離れ、別の地で暮らし、成長していく間もずっと心の片隅で消えることなく、彼を韓国に向き合わせ続けていたという。幾つもの外国語を流暢に話せる鳥飼さんは、大学院で文化人類学を専攻し、小学館で編集者として仕事をし始めた。1994年、彼は、韓国のアニメーション会社「大元」にいたファン・キョンテ氏と知り合い、日本と韓国で共同制作マンガを作ることを約束した。

それから時が流れ、鳥飼さんが「バンチ」の編集者になり、ファンさんは「鶴山文化社」の社長になった時、長年夢見てきた共同制作の話が動き出したのである。そしてその時期は1988年のオリンピックで日本では韓国に対する関心が高まり、2002年ワールドカップ共同開催で日韓の関係が急速に接近した時でもあった。

鳥飼さんは「日本と韓国の若い人たちがお互いにより理解し合うようになってほしい。それは今時の大衆文化だけではなく、歴史や民族のようなシリア

スな問題についても向き合ってほしい。しかしそのような問題は重いメディアでしか扱わない。しかし若者はそんなメディアはあまり見ない。彼らは大衆文化的なメディアは好きだし、よく見る。しかしそこではそんなシリアスなテーマは取り上げない。そこが問題だ」という。彼にとってマンガを共同制作するという事は、日本と韓国の歴史的・政治的認識の問題と課題を若い世代を含めてより多くの人たちに明示し、それを一緒に乗り越え、克服するための手段であり、方法であった。そのため若者が取りやすく、読みやすいマンガの中で、日本と韓国の様々な問題をまず明らかにし、ぶつけ合う場を作りたいと思い、会社を説得し、原作者を動かし、韓国の担当者に働きかけたのである。

一方で韓国側のファン・キョンテ社長の約束を引き受けた二人の担当者は個人的にマンガで歴史・政治的な重い話題を取り上げることにに対し疑問を持ちつつも、日本主導で決められてくるコンセプトに対し、韓国と韓国人の認識を反映させるために努めながら、日本でまとめられる原稿をもらい、韓国人の作画者に完成させる役割を果たしていた。彼らは日本の鳥飼さんのような個人的な強い思いや動機はなかったが、日韓間の初めての企画であるこの共同作品作りに期待と好奇心を持って加わった。

マンガ『プルンギル：青の道』は日本では2002年3月から2003年7月までマンガ週刊誌「バンチ」で、韓国では「鶴山文化社」のマンガ雑誌「ブッキング (Booking)」で連載された。その後、5冊の単行本が日本の「新潮社」と韓国の「鶴山文化社」で発行された。

「バンチ」を発行している「コアミックス」社は平成12年、新潮社をパートナーにして漫画家の原哲夫、北条司、次原隆二や編集者の根岸忠、堀江信彦など「月刊少年ジャンプ」を中心に活動した人たちが中心になって作られたが、その社是が「漫画事業に専念する」「漫画の発展に寄与する」ということからみても、近年の漫画状況に不安や不満を抱いた人たちが集まって作っ

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

た会社である。一方、韓国の「鶴山文化社」は1995年設立され、少年マンガマガジン「チャンス (CHANCE)」、少女マンガマガジン「パーティ (PARTY)」、ヤングマガジン「ブッキング (BOOKING)」などを発行し、多くの日本マンガ単行本の韓国版を出版してきたところであるが、最近では絵本の出版、キャラクター事業、韓国マンガの育成や外国進出に力を入れている会社である。

韓国側は編集者の金拾憲氏、国際部の鄭盛旭氏、作画のクォン・カヤ氏が参加し、日本では編集者の鳥飼さん、原作の江戸川啓視（筆名）、またアシスタントやカメラ・資料担当者などのチーム体制が取られた。全ての意味においての共同制作を目指した日韓チームは、企画から内容の展開など全過程を話し合いで決めていくことを理想としたため、通訳をはさんだ国際電話が日常会話の手段になった。このコミュニケーション方法は必要不可欠な方法であったが、大変窮屈で時間と忍耐を要するものであった。

制作は以下の手順で行われた。例えば日本のパンチに載せるには、まず原作者シナリオ作成（日本）→ 電話を使った読み合わせ：鳥飼さん、金さん、鄭さん（日本と韓国）→ クォンさんの絵コンテ（韓国）→ 日本に送信 → 原作者チェック（日本）→ 電話でクォンさんへの修正要求または打ち合わせ（日本と韓国）→ 作画（韓国）→ スケニング・アップロード；インターネットウェブにおけるパンチ用のデータベース（韓国）→ 日本のDTP、ダウンロード（日本）→ プリント（日本）→ 書き文字を当てはめる（日本）→ DTPデザイナーがパンチ用のデータ作成（日本）といった、日本と韓国を行き来する複雑な過程が必要だった。

今回の『プルンギル：青の道』の日韓制作過程において仕事のやり方や考え方で日本と韓国の違いがいくつか明らかになったが、それらはまず、編集者の地位である。日本の編集者は一つの作品の担当で、時間と力を注いで、作品づくりに専念できる。そのため、日本の編集者は作品に対し積極的に発言し、影響力を持つことがあるが、韓国の編集者は同時にいくつかの作品を

担当し、一つの作品にかけられる時間が限られているため、作家主義的性格が強い。

第二に、日本は事前調査、資料準備などに使える予算やチームワークで取り組める人的サポーター体制が整っているのに対し、韓国は資金面でも人的面でもまだ零細的であったため、多くのことを日本に頼ることになった。

第三に、仕事に対する態度である。作品が連載されたところが週刊誌であること、今回の作品が共同制作であるため通常以上の時間を必要とすることから、連載期間中は多忙なスケジュールになっていた。日本のスタッフたちがこのスケジュールをこなすため、個人的な生活をほとんど犠牲にして取り組んだのに対し、韓国のスタッフはしばしば仕事より家族の生活を優先させることがあったため、両国間の摩擦があった。たとえば、仕事のスケジュールが間に合わなくなったため、日本のスタッフが正月休み返上で仕事したのに対し、韓国のスタッフには仕事より先祖へ祭事と親族の集まりが優先になるのである。

第四に、日韓の歴史や社会問題などに対する認識の違いである。マンガ「プルンギル：青の道」はこの日韓の認識の違いをテーマとして積極的にとりあげている。日韓の認識の差は両スタッフの認識の葛藤でもあり、マンガの内容でもある。そして共同制作過程を通して得られた問題の明確化や歩み寄りが再びマンガの内容として反映されることになるが、この問題については次でより詳細に見ていくことにする。

以下では両国の制作者たちが原作つくりと原画に至るまで議論し尽くして作り上げマンガの内容をみることにしたい。

2. 『プルンギル：青の道』の内容分析

『プルンギル：青の道』内容は以下のようなものである。新宿の繁華街で身体全体の関節が外れ、筋肉がねじられ、ボロボロの雑巾のようになった女性の死

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

体が発見された。そして、その現場の壁にはハンゲルで「鬼神の血、恨み、至福、これらのおどろおどろしい言葉を私は心より理解した」という文章が血で書かれていた。やがてこの異様な事件はソウル、プサン、横浜、新宿など、韓国と日本にわたる連続殺人事件で、犯人は日本人とも韓国人とも言えるような状況であったため、両国の共同捜査が始まった。韓国側では警察大学出身の若いキャリアーで哀美里兵法、韓国のテキョン、日本の古武術に堪能な姜青道（カン・チョンド）警鑑が参加し、日本側ではノンキャリア組の叩き上げ風の刑事、言動は雑だが、部下の信頼も厚く、優秀な猪瀬道徳（イノセミチノリ）警部補が担当することになる。

やがてこの事件は二人の殺人者が関わった二つの異なる目的のために行なわれている事が明らかになる。つまり異常快楽殺人者によるものと政治的目的のものである。しかしこの二種類の殺人事件はいずれも1970年代の韓国の朴正熙大統領暗殺計画から由来するもので、当時この計画に関わった人の中で、これを暴露しようとする動きが出たことに対し、これらを阻止しようとする人たちが仕掛けた事件であった。

1970年代、反独裁民主化運動をする韓国人の若者、韓国に留学する日本人の学生、日本人のお父さんと韓国人現地妻のお母さんを持つ若者、朴大統領の経済政策に乗っかろうとする日本企業、日本の左翼運動家、韓国の反朴大統領勢力のものたちが絡み合っただけで、30年後に新たな大量連続殺人を起こしたのである。

しかしこの事件はこの30年間に関わるだけではなく、壬辰倭乱（文禄慶長の役）から朝鮮最初の民衆の乱と言われる洪景来（ホンキョンネ）の乱、日本帝国による朝鮮の植民地化、近世の朝鮮民族の放浪の歴史、朝鮮戦争、朴正熙大統領時代の日本と韓国関係などに根を持つものであり、主人公である二人の刑事や彼らが出会う登場人物の口を通して、この歴史の上で蓄積されてきたそれぞれの国民感情や偏見などを披露させている。そしてこのマンガ

の制作者たちは日韓関係を解いていく方法として、主人公の二人の刑事が自分たちの感情を噴出させ、知識を得ることによって、お互いを理解し、真の友達になるという結末を用意しているのである。

また制作者たちはこの物語の中で、日韓の間で普遍的に問題になるものとしていくつかの話題を選んでいるが、それには漢字の読み方や使い方の相違、韓国語に対する認識不足、お互いに対する呼び方、南北分断、東洋拓殖会社と植民地化に対する意見、一般的な歴史認識の違いなどがある。

その中で最も象徴的で微妙な関係性を表す言葉が朝鮮人と韓国人の名称に関するものであると思われる。現在の韓国人は韓国（ハンクッ）、韓国人（ハンクッイン）、韓半島（ハンバンド）、韓民族（ハンミンゾッ）という言葉を使う。歴史的な文脈において朝鮮時代（ジョソンシデ）、朝鮮王朝（ジョソンワンジョ）などの言葉を使うが、この朝鮮という言葉は韓国人にとってある面で葛藤的な言葉である。建国以来の誇るべき民族史でありながら、言葉の終わりが韓国人に屈辱的な日本による植民地化を思い出させるのである。

しかしそれは朝鮮（ジョソン）ではなく、朝鮮（チョウセン）であり、朝鮮人（チョウセンジン）であって、このマンガでも日本人に韓国人を朝鮮人（チョウセンジン）と呼ばせている。それは多くの日本人が韓国人に対し植民地時代の意識を引きづっているか、あるいはその変化に対する無関心や無視を現わしている。だから「おまえは朝鮮の人か」に対し「韓国人だ」と言い、「朝鮮から来たか」に対し「韓国から来た」と答えさせているのである。

しかし韓国か、朝鮮（チョウセン）かの名称は、朝鮮人民共和国の存在によってより複雑になる。日本において韓国と北朝鮮という名称が一般的になっているが、南北分断の原因とその結果に日本がどう関わっていたかについて無知な日本人、朝鮮植民地時代の認識のままに日本人の意識が両国の問題の原因であると韓国人の主人公に言わせているのである。

それに対し日本人の主人公猪瀬は、韓国の歴史へのこだわりと被害者意識

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

が両国の問題だと言う。過去は過去として受け入れ、前に進むべきであるとする。「おれがいつ・・・あなたの頬を殴った?」「やったのは俺じゃねえって」親たちがやったことを子供にまで負わせ続けようとする韓国の認識に問題があるとしている。

さらにこの作品では日本人が韓国人に対し、また韓国人が日本人に対してもよく聞かれそうな台詞が数多く出ている。例えば、日本人は韓国人にこう言い放つ。「こっちの政治家の言動にいちいち目くじらを立てるお隣さんには頭にくる」「その察しの悪さと頑迷さはおたくら民族独特だな。だから近代化が遅れるのよ」「亭主と息子が在日と仲良くしたばかりに親戚中、いや町中からつまはじきにされたんだよ」

韓国人も日本人に対して言及する。「警察は在日には残酷だから拷問されて犯人にされちゃうよ」「私たちの年の人間は日本語が話せますよ。日本人に・・・させられていましたから」「今の私は“張”(ジャン)ですがね かつては“張本”(はりもと)という姓でした。だから私ら世代の人間には日本によい感情を抱かない者もたくさんあります」「俺はこの国で時々見る根拠のない優越感と差別には腹が立っている。ただし、そうでない日本人が大勢いる事もわかった。彼らに免じてあんたらは事は許す」「日本人は仕事の虫だ。彼らは夏休みも健康も家族も何もかも犠牲にして国や社会1番で生きている」などである。

さらに日本人は日本に対し、「ここらはスパイ天国ですし、・・・この国はこれで国家と言えるのかいな」「逆に平和ボケしてるからこそあんたらに俺ら絶対負けないんだよ。この国には思想もない愛国心も薄い若造どもは遊び惚けている。あんたらは国の若者が兵役でひいこら言ってる時にな。だがこの国の利口な奴らはその時期に人生のありがたみを知る。自由の貴重さを知り、権力や権威を疑うことを知るんだ。頭が一番柔らかい時期にな。だからあんたらには負けないよ」。韓国人は「わが国は俺とあんたが大嫌いなこの国(日本)とじつは運命共同体なのだ」「あっちの(韓国)男はかなり表情豊かだか

らね。逆に日本の女の子は韓国の女性と違ってなぜそう表情豊かでオーバーアクションなのか違和感ありますよ」と意見を述べる。

以上で見てきたように日本人が韓国・韓国人を表現する言葉として朝鮮人(ちょうせんじん)、在日(ざいにち)、物騒な国、夜中に海からやって来る連中、キムチくさい、冷麺屋、腰抜け、察しの悪さ、頑迷さなど用語が使われたし、韓国人は日本・日本人にチョッパリ、狡猾、平和ボケした国、根拠のない優越感と差別、仕事の虫、背が低い(絵)などの表現を用いている。そして日韓間の歴史的な事件として「壬辰倭乱(文祿慶長の役)」、「日本による朝鮮の植民地化」「南北戦争(朝鮮戦争)」の三つを大きな流れを作った事件として取り上げている。

最後にこの連続殺人事件の結末を持って、このマンガで表象しようとする日韓関係について話すことにするが、その具体的な内容に入る前に、まず日本版単行本の編集に目を向けてみると、各巻の後ろには「・・・日本で発表された韓国人作家の作品は、日本・韓国のどちらか一方の読者に向けて描かれた後に“翻訳”されたものであったり、あるいは両国の過去の歴史にはまったく触れないファンタジックな設定のものばかりでした。そこに、史上初めて日韓両国の読者に向けた漫画作品として誕生したのが『プルンギル-青の道-』です。その内容は、日韓両国の愛憎というハードなテーマに真正面から取り組もうとしています。本作の制作にあたっては、歴史的経緯にかかわる題材について日韓制作スタッフによって十分な検討がされ、時にはその解釈を巡って激論が交わされることもありました。登場人物の言動の中には、ときに読者の皆さんに不快感を与える表現があるかもしれません。しかし日韓両国の主人公が意見を戦わせながら互いの偏見を乗り越え、関係を結んでいく物語である点を何とぞご理解いただけますよう、お願いいたします。・・・いわゆる「拉致問題」を発端とする様々な報道が過熱化しておりますが、本作品は朝鮮半島や在日朝鮮・韓国人への差別・偏見を助長する意図の一切な

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

い事も申し添えておきます」という「読者の皆様へ」の文書が書かれている。それを通してこのマンガの制作者たちはこの作品が既存の日韓間で交流される文化に対し、批判的な姿勢を持ち、それを乗り越えるために作られたものであり、明確なテーマと目的を持っているものであるというメッセージを伝えている。

日韓の愛憎を制作者たちの真剣な話し合いによって描くこのマンガは二つの結果と結論を導き出した。まずは日本と韓国の二人の主人公を通して自分らが持っている相手に対する鬱憤を投げ合い、歴史的認識の相違をぶつけてみたが、同意や妥協点を見出すことは出来なかった。益々お互いの認識の違いが鮮明なただけであった。しかしこのぶつけ合うことによって、いつかこの折り合えない関係から個人として信頼でき、違いを認め合える友達関係になりえたことを発見したのである。最後に韓国人の主人公姜青道は「朝鮮の人間の“恨”はたんに相手を憎んでいるだけではないのです。好敵手として相手を認め、だから恨み、嫉妬し・・・いつかお前に追いついてやるぞ。見返してやるぞ。今にみてるよ・・・そう思う心なのです」と話す。着地点のない歴史認識の問題を抱えたままでも新たな信頼関係、友人関係は作れることを見せたかったようである、この関係は作品の登場人物たちの出来事だけではなく、実際マンガの共同制作のため、議論を尽くし、作業を続けてきた制作者たちの関係をも語っているように思われる。

第二の結果はより象徴的で回避的であるため、更なる議論と分析を必要とするものである。このマンガには二通りの目的によって二人の殺人者が存在し、二人の日韓の主人公によって彼らの正体が明かされる。一人は仮名江見俊輔、韓国名が金という男である。彼は時々来ては日本語を教えた日本人の父とピアノばかり弾いている韓国人のお母さんに育てられた混血である。「どうして人を殺したんだ 日本人韓国人両方に対する恨みか？」という姜刑事の質問に「日本人？韓国人？顔をよく見てみる。どちらがう？」「ただやっ

てみたかったまでだ」と答える。

彼は韓国の「咸鏡道の虎」の伝説に即発され、人を殺し始めた。「咸鏡道（ハムキョンド）の虎」の伝説は倭賊の暴虐非道ぶりに腹を立て、朝鮮に投降しようとする倭軍を飲み込んで、知恵のついた虎が次々と倭賊を襲い殺し、時には怖がらせるだけのために倭賊を食らわずに宙でぐるぐるひねり、ねじり、ぼろぬのような死体にして立ち去ることもあって、朝鮮の民百姓から「とら將軍」といわれる英雄となり、倭賊からは「とら魔王」とよばれ、おそれられるようになったという話である。日本の良心的な魂と朝鮮の虎が合体して日本の残虐者たちをやつける伝説に即発された現代の殺人者は日本人の父と韓国現地妻の母を持って、民族の持つ恨みが音楽にどのような影響を及ぼすかを研究しながら、多くの日本人と韓国人を殺したのである。

二人目の殺人者は韓国名洪仁浩（ホンイノ）、本名イゴール・トシヒロ・エミの男である。彼の先祖は壬辰倭乱（文禄慶長の役）際に降倭した哀美里（えみり）で、加藤清正と戦った西海公派13代世宗洪大宇（ホンデウ）の養子になり、新たに南海公派初代世宗となった洪志濠（ホンジホ）の子孫である。壬辰倭乱（文禄慶長の役）の時は朝鮮王朝を助けるため日本を裏きり、洪景来（ホンキョネ）の乱の際は朝鮮民衆のために朝廷を裏きり、敗れ、追われて北のロシアにまで逃げたが、第二次大戦前、一族は二つに分かれ、一つは朝鮮に戻り、もう一つの派はソ連人になったのである。

殺人者の洪仁浩はソ連人になった一族の子孫で、彼らは韓国に戻りたいと願っていたが朴大統領の反共政策のため、韓国に戻ることが出来ずに、日本名を持った朝鮮系ソ連人として生きている中、ソ連の特殊部隊の人間であった彼のお父さんが朴大統領の暗殺計画に雇われ、韓国入りが可能になったが、暗殺は失敗し、お父さんは殺されたのである。30年後その息子である洪仁浩が暗殺事件の暴露を防ぐために同じように雇われ、韓国と日本でその関係者たちを殺していたのである。事件解決後、猪瀬刑事の「ウズベキスタンは田

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

「捨てが悪いところじゃねえだろう？」という疑問に対し、姜警監は「それなのになぜ北の脅威に曝され・・・日本やアメリカにうまい汁を吸われ続ける軟弱な国に帰化したいか・・・って話ですか？」「アイデンティティの問題です」と答える。

マンガ「プルンギル：青の道」には日本人、韓国人、在日、日本に帰化した在日の韓国人、朝鮮に帰化した日本人の子孫、日本人と韓国人の混血、旧ソ連人などいろいろな背景の人たちが登場する。その中で日本と韓国の秩序を侵すものは「混血」と「帰化者」であった。日本人と韓国人が自らの民族意識を確認し、それらが出会い、ぶつけ合うことによって、その葛藤を乗り越え、友人になれるという展開と結末が用意されていたことに対し、日韓における曖昧な存在たちが両方に危機を引き起こすものとして登場するのである。彼らの正体性の問題は彼ら個人に限らず社会にも影響を及ぼす。日本人でありながら日本人でない人たち、韓国人でありながら韓国人でない人たち、朝鮮人になった日本人、日本人になった韓国人、数百年間続いている彼らの存在、彼らのアイデンティティ葛藤が、このマンガでは歴史的な悲劇とも歴史的な問題を解決できる存在とも言及されることなく、ただ両国の歴史上の現実として描かれるのである。

4人の登場人物、つまり韓国人の警監、日本人の刑事、日韓混血の殺人者、日本人の血が流れる朝鮮系ソ連人の殺人者の中で、マンガの制作者たちが前の二人を「正」の存在として、後ろの二人を「負」の存在として描いたことに関しては、制作者たち自らの無意識的な偏見も含め、より詳しい検討が必要と思われる。しかし制作者たちが日韓関係を韓民族と日本民族の向き合いだけではなく、その間の歴史・社会的な経緯で生まれた曖昧な存在までもを含めた複層的な次元で見せてくれたことは評価すべきである。

3. 『プルンギル：青の道』の結果と意義

このマンガは日本でも、韓国でもあまり人気はなく、日本の単行本では各巻が約1万部売られたただけであった。その不人気の理由として挙げられたのは、まず、内容が日本人にとっては重すぎて、歴史的な事件や社会的偏見など気軽に楽しめるようなものではなく、反面、韓国人にとっては馴染みすぎて新鮮味がなかったことがあげられるが、この両国民の内容に対する反応の違いが、歴史認識に対する関心の違いを反映しているものであると思われる。第二に日韓間の歴史的な事件を出来るだけ多く取り入れようとするあまり内容的に無理な展開があり、ストーリーを追っていくことが困難であった。第三に韓国的な絵のタッチが日本人にはとても馴染みがなく、すぐには目に入らないとの反応が多くあったなどである。

韓国の編集者の金さんは日韓共同制作について以下のような感想を述べた。「とても勉強になった。日本のマンガを読んで学習するというだけではなく、このような機会では日本人がどのようにマンガを作っているのかの現場を直接見せてもらったのは本当にいい経験だった。日本の体系化されたシステムは学ぶべきものだ」「日本では一作品にかかるお金と時間と人数が、韓国と比べられないほどだ。だからあんなにいい作品が作られるんだ」とした上で、「今回の『プルンギル』はある面で失敗だった。共同制作のテーマとして『プルンギル』はふさわしくなかった。韓国人にとってここでの歴史的な問題や偏見や差別の問題などはとてもよく知っていながらやはり気の重いテーマである。誰もそれをマンガで読もうとは思わない」「大衆文化というものは、特にマンガは娯楽性を基本とするんだ。人々が気軽に楽しめるようなものでなければならない。そこに教育的なものや教訓的な要素を前提にやるべきではない。その面で今度のマンガは失敗だった。鳥飼さんの熱い思いは理解できるが、その問題はマンガで表現すべきものではなかった」と述べた。

日本の鳥飼編集者は「とてもスケジュール的に大変な作業だった。この共

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

同作業の連載をする間は一日の休みもなかった」「この共同作業は大変意味のある仕事だったと思う。特に日本の若い人たちに少しでも両国間の問題を知ってもらいたかった」「マンガは今の日本の若者に最も親しまれるメディアであり、最も許容範囲の広い媒体である。娯楽を追及するだけではなく、もっといろいろな目的で使える、もっともパワフルなメディアだ」とした。

以後もこのような共同制作を行なう可能性について尋ねたところ、韓国の金さんは「いずれ面白いテーマの作品があったら、また制作してもいいと思う。しかし共同制作にはSFのようにあまり時代とか、現実の国や政治とかに関係ないものがふさわしいし、編集者として面白くて売れるようなマンガづくりを目指したい」とし、日本の鳥飼さんは「ぜひ持続的な流れを続けて作っていきたい。ただし売れないとすれば会社からの許可が出ることはなかなか難しい。しかし日韓の若者がこのテーマを真剣に考えていくべきだと思うし、そのことにおいて大衆文化からの接近というのはとても有効な手段になりえる。その意味でこの作品が正真正銘の共同作品として最初の試みであったということに誇りを感じる。ぜひ何らかの形で続けていきたい」と話した。

以上でみてきたように、この日韓共同制作は日本と韓国の違いや問題を鮮明に噴出していた。その違いは今回の作品の内容でみられる歴史的な認識に対するものだけではなく、仕事への取り組み方や態度、そして共同制作はどうあるべきかについての認識の差異までもが異なっていた。すなわち韓国側が基本的にマンガは楽しめるものでなければならないし、共同制作の目的は両国の市場でより多くの人たちに見られ、売られるものを作ることを重視したのに対し、日本側は今回のマンガを両国の歴史的・社会的問題を扱うことによって、少しでもその解決への道具・手段として捕らえる側面が強かった。もちろんどちらも大衆文化の商品と問題喚起の手段という二つの側面の両方を認めていたが、どちらをより優先するかというところでずれがあったように思われる。

この共同制作の作品の結果をより見極めるためには、制作者側の意図とその制作者たちの認識が反映された作品内容の分析だけではなく、受け手－日韓の消費者がこの作品をどう解釈し、受け止めたかについての調査が必要である。しかしながら今回この論文では主に制作者側の思いとそれが作品内容としてどう反映されたかを集中してみた。その面においては『プルンギル：青の道』はマンガという娯楽性の強い媒体を用いて日韓の若者たちに両国の歴史的・社会的問題に関する意識を喚起し、それらを乗り越えるきっかけにしたという意味で共同制作という創作形態のもう一つの可能性を見せてくれたと思われる。

Ⅲ. 東アジアにおける共同制作の現状

以上でみてきた『プルンギル：青の道』は日本と韓国の間でよこたわっている様々な問題をあえて浮き彫りにし、積極的にぶつかり合うことによって和解のきっかけになりたいと共同制作されたものである。このような目的で作られるものはまだそれほど多くは無いが、例えば2005年、キム・テイル監督と日韓の四つの市民運動グループによって作られた『あんによん・サヨナラ』というような作品がある。このドキュメンタリー映画は、靖国問題をテーマにし、両国の多様な声を取り上げ、理解を深め、歴史をきちんと清算することを目的としている。

最初の所で共同制作の目的を大きく四つに分けてみたが、無論、ある制作が一つの目的を持つというよりは、むしろいくつかの目的や理由で行なわれる場合がほとんどであると思われる。その中でもビジネス的な視点から共同制作という形式が取られることが最も多いと思われるが、その現象がより目立ってきた分野が音楽業界である。例えば音楽の韓流ブームを作った「SMエンタテインメント社」のイ・スマン社長が「韓国、中国、日本を分けて考えるのではなく、アジア vs. アメリカ、アジア vs. ヨーロッパにすべきであ

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

る。アジアのスターが世界のスターになるのであり、そのためには韓国のカルチャーテクノロジーと日本の資本とシステム、中国の市場とリソースを合体させた形で展開する必要がある」（韓国 SBS 放送、ハンスジンの「サンデークリック」2005年5月29日『韓流パワー：BoA、イスマン』）と主張したことからも見えるように東アジアを大衆文化の生産と消費における共同地域体にしていこうとする動きは確実に大きくなってきている。そしてこのようなビジネス的な展開で生み出される大衆文化の内容と意味に注意を払いつけておく必要がある。

これら以外にもテレビのドラマや特別番組などでよく見られる記念日的な共同制作がある。韓中修交10周年記念ドラマ、2005年日韓友情年記念番組などがそれである。このような記念碑的な作品は実際にお互いの国民の関心を高め、ある関係性を印象つけられるきっかけになったが、新たに作られた安易なイメージを固定させるとの批判も受けている。例えば、2002年ワールドカップ共催記念で韓国のMBCと日本のFUJIが共同制作したドラマ「フレンズ」は、日本における韓流ブームのきっかけにもなったが、日韓関係を現す新たなコンセプトとして「日本人の女と韓国人の男の恋」という固定的な物語の出発にもなったとも言われている。

そして共同制作をどう定義するかにもよるが、東アジア地域における共同作業という面では、アニメーション分野が最も長い歴史を持っている。下請けや分業ということから考えると東アジアにおけるアニメーションの共同作業の歴史は1960年代後半までさかのぼる。長い間、日本主導的な関係から、徐々にパートナーシップを訴える共同制作の関係が増えてきた。その背景としては、例えば韓国のいくつかの会社のように、日本の下請けとして働いてく中で資本と技術力を蓄積し、さらに政府の政策的なサポートを受け、大きく成長できたことなどが上げられる。しかしこのような長い歴史を持つ分野だけではなく、最近ではあらゆる分野での共同制作が企画されている。ゲーム

などのデジタル技術やコンピュータ関連のものはもちろんのこと、最も国際的な共同制作とは縁のないように見える小説分野でも日韓共同作品が登場した。

韓国の孔枝泳と日本の辻仁成による『愛のあとにくるもの』(幻冬舎、2006年)である。日本人と男性と韓国人の女性の恋愛をその別れてから再会した時点までを描いているが、韓国女性の視点からの話を韓国人女性作家孔氏が、日本男性の視点を日本人男性作家の辻氏が別々に書いて2冊の本になっている。以前にも男と女の視点から二人の作家がそれぞれの物語を展開していた小説があり、その意味では初めての試みと言うものではないが、この小説が「韓国人」「日本人」の視点と「女」「男」の視点を複合的に交差したものであるという点においては挑戦的な作品である。このような小説作品が作られた目的と意義はより詳しく検討される必要があるが、これらを読むことによって、日韓の歴史や社会的な認識の問題が日本人、韓国人の個々人の生活や心にどう影響し、どこまで関係してくるかを、そして韓国人、日本人のそれぞれの目線ではどう見えているかを理解できるということである。

IV. 大衆文化からみる東アジア地域の共同体的可能性

大衆文化の共有が東アジア地域の歴史的・政治的問題を乗り越える取掛かりになりえるという意見と、大衆文化と歴史認識や政治・社会問題は全然別次元のことであるという批判がある。実際、1980年代の半ばに香港の大衆文化が中国大陸、韓国、日本はじめアジア全域で幅広い人気を得てから、日流や韓流や華流という言葉が表すようにこの地域での大衆文化の交流は著しく増えてきた。その結果、お互いへの関心や知識も多くなったが、この現象が現実の問題を解決へ導いたという根拠はなく、むしろ新たな摩擦やナショナリズムの問題を引き起こすことさえみられる。

大衆文化によって持たされたお互いに対する関心を持続し、文化摩擦やナショナリズムの問題解決の一つの方法として提示されたのが大衆文化の共同

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

制作であるが、多くの場合、テーマとしてこのような現実問題が直接取り上げられることはない。その面で、マンガ『プルンギル：青の道』は異例であったといえる。一部で非政治的で非歴史的な素材で娯楽的性格の強い大衆文化をもて、この地域を生産と消費の地域共同体にしていこうとする動きが活発になってきたのに対し、『プルンギル：青の道』は大衆文化がこの地域の問題に取り組むための手段になりえることを示し、楽しい体験だけではなく、否の記憶も共有、一緒に克服していく共同体のビジョンを提示した。

今回『プルンギル：青の道』での狙いが十分な結果を得たとは言えないが、大衆文化におけるこのような試みはより多く実践されるべきであるし、その諸事例をもてその普遍性と有効性が検証されるべきであると思われる。そしてこれからビジネス的な観点から東アジアを大衆文化共同体として地域的に結び付けていく動きが益々強くなっていくと思われるが、その際、その大衆文化の内容がこのような問題をどう取り入れていくのか、または回避していくのか、そして、この地域をどう表象していくかを検証し続けていく必要があると思われる。

《参考資料》

【映画】

- 『愛の黙示録』 (1995) 日本・韓国
- 『ペパーミントキャンディ Peppermint Candy -』 (1999年) 日本・韓国
- 『親分はイエス様 ～極道が神を信じるとき～』 (2000年) 日本・韓国
- 『純愛譜』 (2000年) 日本・韓国
- 『春の日は過ぎゆく』 (2001年) 日本・韓国
- 『RUSH』 (2001年) 日本・韓国
- 『ロスト・メモリーズ』 (2001年) 日本・韓国
- 『ソウル』 (2001年) 日本・韓国
- 『力道山』 (2004年) 日本・韓国
- 『あんにょん・サヨナラ』 (2005年) 日本・韓国
- 『あなたを忘れない』 (2005年) 日本・韓国
- 『着信アリ Final』 (2006年) 日本・韓国
- 『黒い家』 (2006年) 日本・韓国
- 『初雪』 (2006年) 予定 日本・韓国

【ドラマ】

- 『フレンズ』 (2002年) 日本・韓国
- 『ソナギ』 (2002年11月) 日本・韓国
- 『STAR'S ECHO ～あなたに逢いたくて～』 (2004年) 日本・韓国
- 『北京 My Love』 (2004年) 韓国・中国
- 『about love 関於愛』 (2005年) 日本・中国
- 『輪舞曲』 (2006年) 日本・韓国
- 『天国の木』 (2006年) 日本・韓国

東アジアにおける大衆文化の国際共同制作の可能性と課題
：日韓共同制作マンガ『青の道：プルンギル』において

【アニメーション】

- 『ベイブレード：トップブレード』(2002年) 日本・韓国
- 『新暗行御史』(2004年) 日本・韓国
- 『TAMA & FRIENDS 探せ！魔法のプニプニストーン』(2006年) 日本・韓国
- 『聖天折紙戦士ドラファラード』(2006年) 日本・中国・韓国
- 『金玉鳳凰』(2006年) 日本・中国・韓国

《参考文献》

岩渕功一編 『越える文化、交錯する境界－トランス・アジアを翔るメディア文化』
山川出版社、2004年

土佐昌樹・青柳寛編 『越境するポピュラー文化と〈想像のアジア〉』 めこん、2005年

毛利嘉孝編 『日式韓流－『冬のソナタ』と日韓大衆文化の現在』 せりか書房、
2004年